

史を さわかせた 女たち

庶民篇



文藝春秋

著者略歴

一九二五年三月東京生。

東京女子大國語専攻部卒業。

小学館勤務を経て文筆業に入る。

昭和三十九年「炎環」で第五十二

回直木賞受賞。

主要著書

『北条政子』（角川書店）

『王者の妻』（講談社）

『日本大歸げんか考』（中央公論社）

『朱なる十字渠』（文藝春秋）

『乱紋』（文藝春秋）

歴史をさがせた女たち

庶民篇

一九七六年十一月十五日第一刷

一九八二年七月二十五日第十刷

定価 九五〇円

著者 永井路子

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

TEL (東京) 二六五一一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

※万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

歴史をさわがせた女たち
(庶民篇)

目次

*ブローグ——意外篇

小町は美女だった？

九

青い眼のニッポン報告

一五

*しごとの手帖——職業篇

最古の職業——巫女

二三

最多の職業——農婦

二七

貞女物語の裏側

三六

金沢の泣き一揆

四〇

紙を漉く女たち

四五

ママという名の乳母

五二

女乞食皇居へ参入

六四

泣き尼の失敗

六九

本陣のおかみさん

七四

悲しきは飯盛

七九

*カネの世の中——金銭篇

平安女性の別れのセリフ

八五

がんばりました三子さん

九〇

し判の女金貸し

九五

ケチケチ比丘尼

一〇〇

金貸し巫女繁盛記

一〇五

*マイホーム今昔——家庭篇

万葉時代の猛烈ママ

一一一

屍を背負って

一一五

息子の蒸発

一二〇

尼寺の素顔

一二六

＊悪事の蔭に——犯罪篇

天明の構造汚職

一三三

美女はサディスト

一三七

首領は西陣の女

一四四

女体解剖第一号

一四九

＊男と女の風景——愛欲篇

奥さまは力持ち

一五五

ありがたい女房

一五九

新妻の髪型

一六五

乳房の痛み

一六九

夫婦交換の決算書

一七三

一度に男を三人持ては

一七八

恋のベテランの不覚

一八五

家出はしたもの

一八九

やるぞ中世『中び連』

一九三

不義密通

一九八

かけこみ寺往来

二〇二

もう一つの縁切寺

二一一

*埋もれた語り部たち——才女篇

おあんの戦国体験

二一七

琉歌は語る

二二一

幕末の語り部

二二五

幕末のマダム・メモワール

二三六

近世女大学

二四一

旅をする女たち

二四五

*エビローグ——古今評論篇

男たちの曰く

二五九

おわりに

二六九

装画・カット

寺戸恒晴

A D

坂田政則

プロローグ——意外篇



女とは何か？ 男ならざる人間の総称だ。
いまさらわかりきったことを……とおっしゃるかもしれない。が、われわれは、本当に女についてすべてを知りつくしているのか。とりわけ過去の日本の女性について、これまでまちがったイメージを持ちすぎてはいなかったか。いま、改めて過去の――それもわれわれと同じ立場にあった庶民の女の姿を掘りおこしてみると、意外な事実を発見するのではないだろうか。

小町は美女だった？

「小町」という言葉から、連想されるのは、まず美女のイメージだ。戦後はミス××という言葉薬にとって代わられてしまったが、ひと昔前までは、

「あの子は、××小町娘」

などとよく言ったものである。

ではなぜ「小町」は美女なのか、というとその起源は平安時代にさかのぼる。そのころ美女としても歌人としても有名な小野小町という女性がいた。「百人一首」に、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

という歌を残していることはご存じの方も多いと思う。彼女については、深草少将が、毎夜通いつめ、くどきにくどいたが、遂に首を縦にふらなかったという伝説もある。そうした

エピソードが、いよいよ彼女を神秘化し日本の美女のナンバー・ワンにまつりあげてしまった。後世「小町」といえば美女の代名詞になり、「深川小町」「葭町小町」などという言い方が生まれるのだが、しかし、平安朝の戸籍をのぞくと、意外なことを発見する。

たとえば、「平安遺文」に収められている寛弘元年（一〇〇四）の讃岐国入野郷の戸籍を見てみよう。おもしろいことにここには、小町に似た名前がずらりと並んでいる。

例えば、額田部並山ぬかたべのなみやまという人の戸籍には、

額田部乙町女ぬかたべのおとまちめ 三十一歳

秦糸町女はたのいとまちめ 四十三歳

日下部今町女くさかべのいままちめ 三十歳

山口石町女 六十六歳

などというのがあるし、ほかにも、

帯町女

満町女

とあって、ついに、讃岐茂有という人の戸籍に、

伊西部小町女 十六歳

が登場する。このほか有町女、吉町女とか、ひどいには町屎女まちくそめなどというのもある。大

体「町」の下に「女」がつく場合が多いようだ。この「平安遺文」は現在残っている平安朝の文書を集録したもので、この時代を研究する学者にとっては大変貴重な史料集である。

じつをいうと、私は別のことに利用させてもらっている。平安朝を素材にした小説を書くとき、この戸籍から名前を拝借するのだ。ずっと以前に書いたものの中に登場する「阿古女」という女は、この讃岐の戸籍の中からとった。

余談はさておき、この町女チャンの行列を見ていただきたい。してみると、何町女というのは、どうもこのころのありふれた名前らしいのだ。それがいつのまにか美女の代名詞になったことを、彼女たちが冥土^{めいど}で知ったら、どんな顔をするだろう。

「そいつはありがたいねえ」

というだろうか。あるいは、

「そうとも、私だって美女でしたからね、エヘン」

というかもしれない。女はいつの世にもうぬぼれの強いものだから。

ついでにいうと、御本尊の小野小町という女性の正体もじつは未だに謎に包まれている。

歌はたしかに何首が残っているのだが、彼女自身については、采女^{うねめ}だという説やいろいろあって、まだ定説はないようである。この「小町」がごくありふれた名前だということは、その謎をとく何かの手がかりにはならないだろうか。

ところで「町女」の並ぶ戸籍についていうと、ふしぎなことに、ここには圧倒的に女が多い。たとえば男五人に女十七人。しかも男のうち一人は老人、一人は少年で、ともに働けるのはたった三人。ひどいになると男は七十と八十の老人二人であとは女ばかり十二人!! 「ホントかしら?」

思わず首をかしげなくなるが、まさしくこれはインチキなのだ。当時はタテマエとしては律令国家だから、班田収授を行って、これによって課税する。その基礎になるのがこの戸籍なのである。当時の法律では、女は口分田はもらえらるが課役はからないことになっていた。男も老人ならば女と同じ。かくて戸籍は女と老人ばかりとあいなったのである。つまりこれは税金のがれの戸籍なのだ。いつの世にも税金をめぐっての虚々実々のかけひきは盛んだったのである。

では国司は、こんな戸籍を前に、税金もとれずに手をこまぬいていたか、というて決してそうではない。彼らもさるもの、戸籍を作って人ごとに税をかけるやり方などやめてしまつて、土地を基本にして税金をとりたてる方式に切りかえてしまつていたらしいのだ。

こうして、班田収授などはやめてしまふのだが、タテマエとしては、戸籍を作らねばならない。それは国司の任務だからだ。しかもこんな女と老人だけの戸籍では、律令的な方式では税金はとれない。国司とすれば、中央に納入する分は少なくてすむ。

小町は美女だった？



「ほら、これじゃ税金もとれませんよ」
と、いうための絶好の口実にもなる。かくて国司はインチキ戸籍に目をつぶる、というわけである。ああ、いつの世にも、おりこうなお役人というものは多いのだ。
だから、ここに並んでいる町女ちゃんたちも、どこまで実在であるかはわからないのだが、

この名前が、実在らしき見せかけを持つことだけはたしかであろう。あまり突拍子もない名前をつけると怪しまれてしまうからだ。おかげで、われわれにも平安朝の庶民の女が、どんな名前と呼ばれていたか、ほぼ見当がつくわけだが、これと対照的に、当時の有名人、紫式部や清少納言の本名は、じつはわかっていない。「紫式部」というのは「紫上の物語（源氏物語）」を書いた人で、父が式部省の役人だった女性」ということだし、清少納言も「清原氏の出身で、一族に少納言がいた女性」という意味だ。こんなふうに当時の宮廷の才女たちは自分の姓や、父兄の官職と呼ばれ、ズバリ本名で登場することはまずなかった。かくてわれわれは、意外にも、上流女性の本名を知らず、かえって当時の庶民の女性の名前だけを知っている、ということになるのである。